

# 1 キリスト教主義教育

## 進捗状況報告

2006.4.1付で宗教主事会に関する規程で整備し、それによって効果的な宗教主事会の活動が、APにもとづく吉岡記念館開設もあって組織的に展開されている。

## 学内第三者評価の評価結果を受けての追加記述

キリスト教教育にかかわる「カリキュラム内容の全学的な調整」の狙いは、関西学院大学教育スタンダードともいべき全学に共通する理解を学生にもたせるといったものであった。その推進のために、大学宗教主事会にプロジェクト担当者を設け、この狙い実現の大きな手引きとして「共通教科書」作成への取り組みを始めた。しかし、その後数年を経てその取り組みは事実上中断している。その理由の第一は、「全学的に共通のキリスト教理解」という目的が、個々の学部における教育の独自性が主張され、十分合意されなかったこと。第二に、このプロジェクトを積極的に推進しようとする宗教主事のなかで、海外留学、他大学への移動などが相次いだこと、である。「関学スタンダードともいえるキリスト教への理解」の必要性について今後も重視しつつ、その具体化としての「共通教科書の作成」という施策については再検討したい。

「チャペルアワーの有効活用」については、学年のはじめにチャペル活動紹介誌"Silence"を作成し、新入学生(大学院を含む)全員に配布し、入学時においてチャペル出席を強く勧めている。また毎週宗教センターから「チャペル週報」を発行し各週のチャペルプログラムについての広報も行なっている。各学部チャペルプログラムの内容など、そのあり方については各学宗教委員会や毎月の大学宗教主事会において、各学部の状況を報告し内容的な改善に努めている。とくに上ヶ原においては全学部合同してのチャペルアワーを毎月一度開催し、それぞれの学部担当によるメッセージ性の高いプログラムを提供してきた。それをたとえばキリスト教の単位と連携させる形である種の強制を働かせて出席者を確保するということは、基本的に考えられてはいない。原則的にチャペルが全学年の学生にも出席を求めるものであり、かつ学生の主体的な取り組みを進めるといった基本的な立場を主事会として維持している。出席者数については、必ずしも全学部で正確な出席者数の把握公表をしていないが、毎年一定水準の学生が出席しているが、先述のようにチャペルが全学生の出席を求めるプログラムであるという立場からすれば、より多くの学生を招くことへの取り組みが重要である。そのためのチャペルアワーを取り巻く環境についての働きかけは現在まで十分になされてきたとは言えず、大学宗教主事会の議論を全学的に拡大浸透させるための組織取り組み、たとえば教授会、学部長会、大学評議会などで関西学院大学におけるチャペル活動の重要性を繰り返し訴え、そのことを議論するということはほとんどなく、それらの場では時々行事紹介程度に終わっていることは問題であろう。より学部、大学全体におけるチャペルのあり方についての議論を深める環境づくりを行う。

2003年度に設定した目標である「キリスト教関連の人的資源の有効活用」は、具体的には学部宗教主事として教授、准教授などに任用されている教員の、その専門性に依拠してたとえば神学研究科などに大学院教員として活用することによって、より充実した高度なキリスト教教育研究体制の確立を目指すことであった。その背景には、大学第三次中長期計画における、「学内人的資源の有効活用」の方針に沿ったものであり、神学部・神学研究科がより広い視点によるキリスト教についての研究教育を目指すという動きに宗教主事の側から呼応しようとしたものであった。ただしこの議論は、神学部および研究科の主体的な取り組みに待つものが大きく、具体的に神学部などとの話し合いをもつ段階にも至っていない。

## 学内第三者評価

関西学院大学の教育の根幹を成す「キリスト教主義教育」について、2005年度の自己点検・評価以降、どのように進んでいるのか説明が不足している。宗教主事会の効果的な活動とは何を指しているか。吉岡記念館の開設によってどのように組織的に展開されているのか。

2005年度の(改善の具体的方策)には、「1.キリスト教のカリキュラム内容の全学的な調整」が挙げられているが、2年間でどのように進捗しているかを記す必要がある。また、「2.チャペルアワーの有効活用」が掲げられているが、どのように進んでいるか。

キリスト教主義教育の充実に関する多くの施策がどのように成果を挙げているかについて検証をし、問題点を発見して改善をしていくプロセスを確立することが重要である。キリスト教主義教育の成果を測ることが容易でないことは十分理解できるが、2005年度の報告書で「全学に関する事項 1-1理念・目的・教育目標」や本項目でも記述されている卒業生調査における「スクールモットーの浸透度」は指標とするに値するデータと思われる。2005年度には第2回の調査も行われており、その結果の分析に基づく現状の把握や課題の抽出が望まれる。